プロローグ

最終版『研究調査報告書』の刊行にあたって

金沢大学名誉教授　(元)フレスコ壁画研究センター長　宮下孝晴

おそらくは日本で最初のイタリア壁画研究センターを金沢大学人間社会研究域に設置し、人文学類フィールド文化学コースの学生を含めた大学調査団を引率して日本とイタリアを4年間にわたって頻繁に往復した日々が多少の疲労感とともに懐かしく思い出されるが、今年3月末で定年退職の時を迎えることになった。当初は4年間の予定でプロジェクトをスタートさせたが、現地調査の充実に追われ、調査・研究成果を納得のいくところまでまとめきれなかった。組織と活動の上では、フレスコ壁画研究センターは国際文化資源学研究センターに統合されることになっていたが、センター独自のプロジェクト成果を明確にまとめるため、大学の了解を得て、結局、2015年9月末までフレスコ壁画研究センターは現実的に活動を継続することとなった。こうして、前年度版の『研究調査報告書』には盛り込むことのできなかった、今年3月に開催した最終報告シンポジウム「イタリアの壁画遺産を守る　日伊共同プロジェクトの成果」や(金沢大学資料館および図書館プロムナードを洞窟教会に見立てた)「神秘体験」写真展、あるいは6月に開催の「第10回 博物科学会」や7月に開催の「第32回 日本文化財科学会」での学術発表成果を本誌に掲載することが可能となった。金沢大学の「壁画文化保存」への挑戦は、もちろんこれでピリオドが打たれるわけではなく、前述のように、さらに広い国際文化資源学研究センターの視野で研究されることになるわけで、これまで私たちのプロジェクトにご協力、ご支援いただいた方々の期待を裏切らぬよう、今後とも継続的に邁進するつもりである。

1. 経緯と概要

南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画群の調査研究プロジェクトとは、金沢大学が日伊共同で取り組んできたフィレンツェのサンタ・クローチェ教会壁画の修復プロジェクトの成功実績に基づき、文部科学省の特別経費を得て、再び国立フィレンツェ修復研究所と連携協力して、2010年度から4年計画でスタートしたものである。

2010年5月、金沢大学人間社会研究域に本プロジェクトの拠点となるべく「フレスコ壁画研究センター」が設置され、人文系、芸術系、工学系、医薬系などの多岐にわたる専門分野の研究員が中世壁画の調査・分析・研究に取り組む画期的な挑戦がスタートした。

こうして金沢大学チームは、壁画の非破壊調査と未来型デジタル・アーカイブの形成を目指し、最新のテクノロジーが結晶した日本の小型デジタル機器を（電気設備などのない）荒涼とした南イタリアのフィールドで活用する可能性の追求にも重点をおいて、(研究所内ではなく)フィールドでの壁画調査に特化した小型診断機器の利用と開発を推進してきた。たとえば、フィールドでの壁画診断調査においてだけでなく、あらゆる文化財研究の場で有益なLED照明機器と小型バッテリーの組み合わせシステムの導入である。

散乱光と斜光線による高精細デジタル撮影のほか、GPSによる位置情報の記録や気球による空撮も重要な調査項目である。地上に立っていては見えない洞窟教会の上部、あるいは洞窟教会周辺のロケーションを上空から鳥瞰することの必要性は、ことに3次元デジタル・アーカイブを形成する際には不可欠な情報だからである。金沢大学チームが誇る2種のレーザースキャ

ナを活用した3次元空間スキャンとミクロン単位での壁画面スキャンのほか、赤外線サーモグラフィ、色差計、水分計、マイクロスコープなどの科学計測機器を用いての分析診断データは、すべてApple iPad に記録・集約統合される。そして、国立フィレンツェ修復研究所の壁画調査チームが担当する(絵具層のサンプリングなどの破壊調査を含む)他の調査データとともに、本センターとイタリアのクルトゥーラヌオーヴァ社(Culturanuova S.r.l 代表：Massimo Chimenti)が共同開発した「文化財保存」「専門研究」「教育と啓蒙」などの目的に応じた新形式のデジタル・アーカイブ（データベース）《Modus Operandi》に記録されてきた。いうまでもなく、本センターがアナログ・アーカイブと称している現場での「原寸大の壁画模写」と「水彩絵具によるカラーサンプリング」が、上記のデジタル計測調査に加わる。

とりわけ、「文化財保存」の観点から形成されるデジタル・アーカイブは、洞窟教会に描かれた中世壁画の現状記録のみならず、将来にわたって定期的・継続的に実施されるであろう診断調査の《症状と経過》を記録するものである。このアーカイブが充実していけば、南イタリアの洞窟壁画が直面している諸症状を系統的に把握することもできるし、「壁画保存の電子カルテ」ともなるであろう。

2. 学術的意義

9 世紀以降、東方のビザンティン帝国やシチリア島から渡来したギリシア正教の修道士たちが南イタリア各地の凝灰岩台地や深い峡谷に定住するようになった結果、多くの特徴的な洞窟教会や修道院が誕生し、祈りの空間である堂内には旧約・新約聖書に題材を求めた多様な図像（壁画）が描かれた。南イタリアのカラブリアやカンパーニア、バジリカータ、プーリア地方に、9～13 世紀にかけてのイタロ・ビザンティン様式の壁画群が数多く残されているのは、こうした時代背景によるものである。それらは概して現在の市街地や観光コースから遠く離れ、簡単には近寄れない地域に広がっており、1960 年代にわずかな調査研究が実施されて以降、本格的、系統的な調査研究が立ち遅れたままになっているため、多くは劣悪な環境下で修復保存の対策すら立っていない現状にある。これらの歴史的にも、芸術的にもきわめて貴重な文化遺産は、中東全域、トルコからシリア、グルジア、アルメニア、エジプトまで、あるいは初期キリスト教が伝播した広範な地中海世界に現存する洞窟教会や洞窟修道院の系列の中にこそ位置づけられるべきもので、早急に各地の研究諸機関が協力して調査・保存に乗り出す必要がある。最終的には各地の研究者がインターネットを介して「電子カルテ」のフォーマットに記入できるシステムが確立すれば、南イタリアの洞窟教会壁画に関する膨大なデジタル・アーカイブの早期形成も夢ではなくなるであろう。今回のプロジェクトの目的は広範囲な学術調査研究を包括して完成するものではなく、同じような地理的・歴史的背景の中で生まれた中世の洞窟教会壁画文化の遺産を有する地域（市町村）に対し、《消滅寸前の中世洞窟壁画の歴史的・文化的価値を地元が認識して守る》ためのネットワーク形成の契機を作ることである。もちろん、学術的には中東ビザンティン地域の壁画技法や分類学の発展に対しても少なからぬ貢献ができると自負している。